

和服製作技術の構造と発達過程の追跡的解明

Prospective Study on Development Process and Structure of KIMONO Making Skills

阿部 栄子¹, 大澤 清二¹, 下田 敦子², 榮 光子², 倉林 佳苗¹, 安部 千亜紀¹

¹家政学部被服学科, ²人間生活文化研究所

キーワード：和服製作技術、技術構造、発達過程、教授・学習

1. 研究の目的

和服製作技術はそれを構成する多様な技術要素の組み合わせによって成立している。この技術の学習及び習熟、発達過程に関する知見と経験は従来長い間蓄積されており、本学の創設者はその実践者であり、また第一人者でもあった。

和服製作技術の教授・学習はこうした伝統に準拠する形で現在も教育課程の中で受け継がれ、実施されている。従って、小中高等学校等における指導指針としての学習指導要領もそうした経験の蓄積を基礎に成立している。しかし、そうした過去からの蓄積を基礎としていっても和服製作を取り巻く社会的な背景は戦前などのそれに比すれば、激的に変容している。

戦後以来急激な和服製作や着装の習慣の消失が起こっており、近年の学生においてもその傾向は明らかである。戦前であれば誰でも習得していた初歩的な技術でさえ、現代の学生たちは獲得していない。被服学科所属の学生達は辛うじて大学における教育において何とかそれらの技能を獲得しているのが現状である。そこで和服製作技術教育(和裁教育)を受ける学生の能力や、レディネスが全く変質してしまっている現在においても、伝統的に構築されてきたそれらの教授・学習課程がそのまま有効であるのか、そのまま適応可能なのかどうかという重要な問題は残されたままになっているともいえるのである。それら技能を殆ど持たない集団(学生)を対象に、どのようにそれらの技術を獲得させ、文化を伝承させていくかということはこの分野の教育の根幹に関わる課題である。

本研究ではこうした現状を客観的に把握して、実態に対応した和服製作技術教育・指導を吟味、検討し、必要に応じてその再編や改訂を含む検討を考えている。これは大妻の和服製作教育のみならず和裁に関する教育全般に波及する問題でもある。

そこで本研究の初年度である平成 23 年度は、一般教育課程である和裁基礎教育における最も初歩的な運針技術の教授・学習課程を取り上げて、現代の学生の能力、実態に対応した運針技術の教育・指導を検討するための基礎的データを収集することを目的とした。

2. 活動実施報告

和服製作技術教育を受ける学生(学習者)の能力、レディネスの状況を知る手掛かりを得るために、

1) 運針技術習得に関わるアンケート調査、2) 運針技術習得に関わる実態調査、を実施した。

さらに、「従来の伝統的に構築されてきた運針技術の教授・学習課程」の有効性を数量的に明らかにするための基礎データを収集するために、

3) 学習者らが運針技術を身体で習得していく過程、その身体動作を動画として記録した。

4) 3) において得られたデータ(動画データ)を観察して、運針技術がいかなる技術要素により構成されているのかを身体動作の視点から分析しそれらを定義した。さらに、定義した技術要素について、学習者が当該の技術要素をどの程度習得しているかを評価するための尺度を定義した。

上記 1) ~ 3) は、平成 23 年 4 月~7 月にかけて、一般教育課程「和服製作基礎」の授業において実施された。調査対象者は、受講者(学生 112 名)であった。4) は授業終了後(7 月以降)に実施した。

1) 運針技術習得に関わるアンケート調査

調査対象者にたいして、運針技術の経験の有無、和服製作の経験の有無について調査した。

2) 運針技術習得に関わる実態調査

一般教育課程「和服製作基礎」の授業開始時(4 月)における調査対象者の運針技術習得の状況について調査した。実施にあたっては、112 名分の運

針用布と縫い糸を準備した。専門のベテラン指導者が運針技術をテキスト・マニュアルに準拠しつつ、従来の教授・学習課程に沿って示範と教授を行った。対象者がそれを習い実際に行う様子(15分)を複数の観察者が肉眼で丹念に観察、記録した。

3) 学習者らが運針技術を習得していく過程(身体動作)を一定期間毎に(週に1回、各15分(計13回))、デジタルビデオカメラを用いて、撮影した。

4) 3)により得られた動画データをモニターにより出力して、複数の分析者が画像を肉眼で観察、分析し定義した。運針技術は身体動作の視点から粗大な筋力による運動の能力(gross motor skill)と微細な筋力による運動の能力(fine motor skill)に分類した。

粗大な筋力による運動の能力

1. 背筋は伸びている
2. 肩が水平である
3. 状態がねじれていない
4. 腕が90度以上角度である
5. 机の上に肘をついていない

微細な筋力による運動の能力

6. 針を親指と人差し指で持っている
7. 針先が指先から長く出していない
8. 針を持つ手と布を持つ手が離れている
9. 上体に対して布が平行である
10. 親指が上を向いている
11. 布を緩ませず張っている
12. 指貫をはめている中指が布の向こう側である
13. 針を持つ手の親指の付け根と中指で布を掴んでいる
14. 針と布が直角になるように上下運動している
15. 親指先に布がたまっていない
16. 親指が動いている
17. 人差し指が動いている

また、運針技術が施された布標本をもとに、技術を分析し、これらを定義した。

18. 玉どめをしている
19. 糸しごきをしている
20. 縫い目がまっすぐ
21. おどり針でない
22. 波針でない
23. 縫い目が揃っている
24. 表裏針でない

25. 不同針でない
26. なわ針でない
27. 長さ(cm)
28. 5cmあたりの針目(目)

3. 研究目標の達成状況

本研究の初年度である平成23年度は、研究の初次的な段階として基礎データを収集することを目的としたが、その目的はほぼ達成された。

4. まとめと今後の課題

1) 運針技術習得に関わるアンケート調査と2) 運針技術習得に関わる実態調査の結果から、対象者(18~19歳、女性)の殆どは、それまでに運針技術の経験が無かったという実態が明らかになった(具体的なデータ、詳細については別途報告の予定)。このことにより、現在実践されている「従来の伝統的に構築されてきた運針技術の教授・学習課程」の有効性をあらためて検討するという研究の意義が示唆された。

3) 学習者らが運針技術を習得していく過程(身体動作)を動画に記録し、それらを全て観察、分析して、確認しうる限りの技術要素を取り出し(28項目)、定義したところこそが本年度の研究成果であったといえよう。つまりここで調査対象者である「現代学生(112名)」がもつ運針技術の身体動作の特徴を記述することができた。今後はこの28の技術要素を用いて既に収集した運針技術動画データ、つまり個人毎の時系データを観察してその習得状況を評価、数量化し、統計手法により運針技術を習得していく発達過程を明らかにする。また運針技術要素相互の関係構造を解明し、続いて運針技術の学習過程の合理的な順次性を検討する。

本研究は基礎研究ではあっても、本学被服学科の根幹をなす技術教育の科学的再検討という性格も持つので、得られた成果は直ちに教育・指導に反映するはずであって、FD活動の内実をなすものでもある。むしろ、結果によってはカリキュラムの改善を予想させるし、広く小中高等学校の家庭科教育にも影響する可能性をも含んでいる。また最終的には和服製作技術教育の合理化と効率化を図ることを目的としているのであって、この分野は家庭科教育の世界でも未開拓であるので、科研費等の外部資金を獲得する可能性は少なくないと考えている。